

中観説における「絶対否定の中道」

——月称における空性の問題——

小 川 一 乗

序

仏教を仏道として思想的に確認しようとするとき、そこに「中道」が問題とされていないならば、それは仏教の思想が仏道として真に論究されたことにはならないというべきであろう。何となれば、「仏教は中道である」と常に語られている如くに、「中道」は仏教の仏道を思想的に確認するときの基本的な問題であると見なされるからである。

ところで、この「中道」は、仏教独自の精神に止まらずに、「中道精神は東洋精神である」といってもよい程に、仏教を生み出した東洋の基本的な精神と見なされるべきであることが究明されているが、^① 積尊が正覚から説法へと旅立ったことによって、仏教が思想言語として表現されはじ

めたその当初以来、仏教にとっても「中道」は最も基本的な仏道観とされてきた。この「中道」をいかに思惟するか、それが求道者の仏道体系を決定しているといえるのである。いな、むしろ、その求道者が自らの最も基本としている仏道体系こそが、まさしくかれの中道観であるといふべきなのである。その意味で、積尊以来現在に到るまで、等しく「中道」を口にしてきたにしても、そのことをいかなる仏道の実践体系の下で確認してきたかによって、「中道」の内景は必ずしも同一ではないはずである。すなわち、中道観が格一化されることはありえないのである。しかし、そうはいっても、「中道」を自らの恣意のままに語ってもよいということではない。少くとも、求道者がそれを口にしようとするときは、自らの仏道体系が明確にされていない

ればそれは不可能なはずであり、自らの仏道体系によってのみ「中道」は語り得るのであろう。

いま、インド大乘仏教における「中道」を問題にしようとするときにも、その代表である中観説と唯識説の間に仏道体系の相異があることによって、自づとそれらの仏道体系に基いて性格の相異した中道観が各々に確認されていなければならぬであろう。特に、中観説は、自他ともに「中観者 (madhyamika)」と公称されている如くに、「中観 (madhyama)」を自らの主張としているのである。いうまでもなく、「中道 (madhyama-pratipad)」とは、「中観の仏道」「中観なる仏道」ということにはかならないであろうから、中観説とは「中観を仏道としている」学説であり、「中道」が求道者にとっての根本的な課題であることを自らの仏道体系の上で明確にしている学説であるといえるであろう。さらにいえば、中観説は、一つの学説、一つのセクトであるというよりは、むしろ、仏道の基本である「中道」を大乘仏教の仏道体系の上で明確にしようとして、その課題と真正面から取り組んだところから成立した学説であるといふべきであろうか。

いまは、その中観説の中でも、特にラディカルな中観説として注目されている月称 (Candrakīrti, 600~650) の主張

する中観説——プラーサンギカ (Prasangika・帰謬論証派) 中観説——における「中道」を論究し、その特徴を明らかにしたい。もう少し具体的にいえば、月称の中観説は、一切法無自性空という中観説の基本的立場からは当然なことであるとはいえ、執着の対象となるすべての根拠としての事物の实在性を徹底的に否定しようとする姿勢の強烈であることをその特徴としているが、その「絶対否定の精神」とも称すべき特徴の上には、どのような中道観が確認されているのであろうか、という問題である。逆にいえば、どのような中道観において、「絶対否定の精神」はありえているのであろうか、ということでもある。

一

まず、「中道 (madhyama-pratipad)」という用語について、その一般的な概念に一瞥を与えなければならぬであろうが、周知の如く、仏道にとっての基本的な用語であるために、すでに枚挙に遑がないほど数多くの研究がなされているので、いまは、きわめて図式的にその概念を示すに止める。それを一言でいえば、

有見と無見の二極端を離れたのが中道である

ということである。この二極端とは具体的には何であり、

中道とはどういう内容であるか、といえ、初期の仏教にあっては、「有見」とは順世外道 (Lokayata) のような快樂主義 (現実主義) であり、「無見」とはジャイナ教徒のような苦行主義であり、それらを離れた「中道」とは、四聖諦の中の道諦、すなわち、八正道である、という説明が一般的に見いだされる。^③

そして、この有無の二見は、常断の二見にほかならないとされ、大乘仏教になると専ら、有無 \parallel 常断という考え方で二極端が示されているといえる。しかも、その場合の「中道」とは何かということになると、初期の仏教におけるような道諦八正道という実践的な具体性をもった表現とは異って、きわめて、抽象的観念的な表現となっているように見られる。しかし、もとよりそれも、仏道の実修の根本をなす観想 (三昧) の内景にあっては、まさに具体的な表現であるのかも知れない。いまその最も一般的な内容を、中観説と唯識説の両者において重要視されている一つの用例で示すと、次のようである。それは、月称も、度々引用している宝積經迦葉品の一文である。

迦葉よ、有 (asti) とはこれ一極論 (anta) である。迦葉よ、無 (nasti) とはこれ一極論である。およそ、これら二極論の中 (madhya) であるそれは、形相を有せ

ず、指示されず、固定されず、無顕現であり、標識されず、知識されないものである。迦葉よ、この中道 (madhyana pratipad) は、諸法の眞実なる観察であるといわれる。^④

と。宝積經の迦葉品には、多くの「中道」が説かれているが、その中には、この引用文の中の「有 (asti)」と「無 (nasti)」を、「常 (nitya)」と「無常 (anitya・断)」に置き換えただけの全く同様の「中道」も説かれている。月称は、それを聖提婆 (Āryadeva・聖天) の四百論第九章「破常品」の第六偈に対する註釈の中で引用している。^⑤ 龍樹 (Nāgārjuna) は、有無 \parallel 常断の理解の上で、それら二極論の否定を「中道」としているのが常であるが、ちなみに、龍樹における有無 \parallel 常断の理解を中論偈の中に端的に求めるならば、その第一章「観自性品」の第一〇〜一一偈にそれが示されている。

有 (asti) とは常 (śāśvata) への執着であり、無 (nasti) とは断 (uccheda) 見である。それ故、賢者は、有なるもの (astitva) と無なるもの (nastitva) に依存すべきではない。

およそ、自性をもって有 (asti) であるそれは無 (nasti) とはならないという常「見」と、今は無であり以

前には存在したという断「見」は、過失におち入るのである^⑥。

このように、有無 \parallel 常断の二見を否定するのが、龍樹以来の中観説における「中道」であるといえるが、そのような規範は、

およそ、勝義「諦」を伺察することによって、常という極論が除かれ、世俗諦を認めることによって、断という極論が捨てられるから、それ故に、増益（無を有とする見解）と損減（有を無とする見解）の極論（anta）を断除せんがために、かの中道（madhyama-pratipatti）が説示されたのである^⑦。

というように、二諦説との関係の上で常套的に説明されていくのである。

すなわち、すでに周知されている如く、中観説における「中道」とは、龍樹の中論偈第二四章「観聖諦品」の第一八偈や廻諍論の最後の偈に示されている如くに、空性によって常見（実体論）が否定され、仮（縁起）によって断見（虚無論）が否定されることであると規定されているのである。このように、この中観説の「中道」においては、空性思想によって常見と断見が否定されるのであるが、それは同時に、空性に対する常断の二見を否定することをも意

味しているのである。空性を真実在として実体視しようとする常見と、空性を虚無的に理解する断見である。すなわち、空性において常断の二見が否定されるのみならず、空性に対する常断の二見をこそ排除せんとするところに、中観説における「中道」の特色があるのである。

ともあれ、このように中観説において規定されている「中道」が仏道という実践場面においてどのようなあり方を取るのだろうか。空と仮という二面性、或いは、勝義と世俗という二諦をもって有無（常断）を否定するその否定精神の内容が次に問題となってくるのである。というのは、月称にとつての「中道」では、単なる空仮とか二諦という図式の上で説明されている「中道」に止まるのではなく、そのようなことを可能にしている「中道」の本質——結論的にいえば、空性こそが中道であるという本質——が問題になっているというのである。有無（常断）二見の否定としての空性が「中道」であるというその場合の「空性」とはどういうあり方において了解されているか、ということがある。

二

ところで、有無 \parallel 常断の二極端の否定ということとは、中

観説にあっては、単にこれだけに止まらずに、すべての対立概念（Ⅱ分別）の否定ということでは、龍樹の中論偈の帰敬偈に八不が説かれて、生と滅、来と去、一と異、常と断、という四対の対立概念が否定されているが、それだけに止まらずに、苦と楽、我と無我など、その他あらゆる場合の対立概念の否定がそこに意図されていることはいままでもない。このことは、いわゆる四句分別においても具体的に示されている。例えば、中論偈の第一八章「観我品」第八偈に、

すべては(1)真実である、或いは、(2)真実ではない、また、(3)真実であって非真実である。(4)真実でなく非真実でもない。これが仏の教えである^⑧

と説かれ、最後の第四句「真実でもなく非真実でもない」といふ両者の否定が、順次に次第した最もすぐれた教えであるとして示されているのである。このことによっても、対立概念の否定が龍樹の中観説の基本であることが知られるであろう。このように、八不に代表されるすべての対立概念（分別）の否定が、中観説における仏道としての「中道」であることに基いて、それが「八不の中道」とも呼称されているのである。

それでは、対立概念の否定とは一体どういうことであろうか。対立概念においては、一方が否定されることによって他方が肯定されるという関係がある。有と無という対立関係においては、有が否定されるとき無が肯定され、有が肯定されるとき無が否定される。真実と非真実という対立関係においても、真実によって非真実が否定される。このように、一方が肯定されるとき他方が否定される、というのが対立関係であるが、いまはそうではなく、対立関係にある両者がともに否定される否定が対立概念の否定である。それは一体どういうことであろうか。この場合、対立する両者を否定する何らかの第三者を設定しているのであるか。もしそうであれば、対立関係にある両者とそれらを否定する第三者とが、また別の対立関係を生み出していくという矛盾を生じることになる。この点について、月称は、そこでまた、有と無とに相異したあり方の第三者としての、その両者（有と無）の了解者なるものが別に何らあるのではない^⑨と、明確に否定している。

三

それでは、八不によって示されている対立概念の否定と

は一体どのような否定であろうか。一方が否定され他方が肯定されるという否定のあり方ではなく、両者ともに否定されるという全面的な否定のあり方が八不の否定であり、それを「絶対否定」と呼ぶことも知られているが、それではその「絶対否定」とは一体どういうことなのであろうか。

この問題に関して、月称が、中論釈 *Prasannapada* や入中論、及びその他の諸註釈書において、自らの否定のあり方を明確に論説しているその点を検討することによって、「絶対否定」の意味、すなわち、八不に意図されている否定の精神を明らかにすることにした。

さて、龍樹は、中論偈において八不の精神を究明しようとするのであるから、まず、はじめの不生不滅の「不生」ということに対する論究から起論している。すなわち、その第一章「観縁品」の第一偈に、

自よりにあらず、他よりにあらず、「自と他の」両方
よりにあらず、無因よりにあらず。

諸法は、いかなるものも、どこにおいても、決して
(いかなるときにも) 生じたるものではない。^⑩

と説かれ、すべての「生」のあり方がまず否定されている。月称は、この第一偈に対する註釈を詳細に行なっているが、その中で、

しかるに、「自より生じたるものではない (*naiva svata utpanna*)」と限定するときには、「構文の上で相対否定 (*pariyudāsa-pratisedha*) となるから」、^⑪「他より生じたるものである」という望んでいない帰結にいたるのではないかと、「清弁 (*Bhāvavivēka*) が」いうならば、そのような帰結にいたるのではない。何となれば、絶対否定 (*prasajya-pratisedha*) が語られようとしているからである。すなわち、他よりの生もまた、われわれは次に否定しようとしているからである。

と、自らの否定のあり方を規定しているのが注目される。ここに月称が言及している *prasajya-pratisedha* とは *pariyudāsa-pratisedha* と共に、インド論理学において周知されている二種の否定型の一つである。いま「絶対否定」と訳出した *prasajya-pratisedha* とは、論理的には「命題の否定」ということであり、そのチベット訳では「なしの否定 (*med par dṣag pa*)」と訳出されている全面的な否定のあり方である。これに対して、いま「相対否定」と訳出した *pariyudāsa-pratisedha* とは、論理的には「名辭の否定」ということであり、そのチベット訳では「名辭の否定 (*ma yin par dṣag pa*)」と訳出され、否定とはいいながら肯定を主とするもの、すなわち、「これは A に

「あらず」とAであることを否定することによって、AではないBであることを肯定しようとする否定のあり方である。このような二種の否定型がある中で、中観説としての否定型が *prasañya-pratisedha* (絶対否定) であるべきことを月称は主張しているのである。

このような月称の主張において、中観説の否定精神が「絶対否定の精神」であることは明らかであろうが、それは、もとより、諸法無自性論者 (*nihsvabhava-dhava-vadin*) という中観説の基本的な立場から将来されるものである。

換言すれば、諸法無自性論者としての中観説にとって、その否定精神は「絶対否定の精神」であらねばならないというところでもある。いま、月称の上に表明されているそのような否定精神のあり方を尋求すれば、枚挙する邊がないほど無数に見出されるが、それらの用例の代表的なものを、次に、かれの中論積 *Prasannapada* の中から整理して列挙してみると、次の如くである。

過誤におち入っている主張より相反する「他なる」主張は、対論者である汝にこそ帰負されるものであって、われわれに関係するものではない。何となれば、「われわれには」自らの主張はないからである。

諸法無自性論者「であるわれわれ」が、諸法有自性論者 (*sasvabhava-dhava-vadin*) をして過誤におち入っているとなさしめるとき、「われわれ諸法無自性論者が」、過誤におち入っている「かの」者の主張より相反する主張を有する者という過誤におち入ることにどうしてなろうか^⑤と。また、

それ故に、過誤におち入っているとすのは、対論者の主張を否定することとして効果があるのであるから、過誤におち入っている主張より相反する主張となることはない^⑥

と云々。これらの意味は、いうまでもなく、中観説の「絶対否定」とは、諸法に自性を認めようとする一切の主張を否定し、一切諸法の無自性を明確にしようとする目的のものであり、従って、そこに、諸法無自性という自らの主張を肯定的に設定(論証)する必要はないというのが中観説における否定型である、ということを表明しているのである。すなわち、AやBの主張を否定するために、AやBにあらざる第三のCという自らの主張を持つことは、Cという自らの主張を肯定的に把握する相対否定となるが、しかし、中観説の否定型は、あくまでも、AやB等々を否定

する全面的な否定のみであるべきであり、そこに何らかの肯定すべきCという側面を自らのうちに持つてはならない。「絶対否定」でなければならぬ、ということである。

四

このように、月称によって徹底的に明確化されている中観説における「絶対否定の精神」こそが、中観説における「中道」の精神にほかならないことを、月称は、次の如く表明している。

それ故に、有 (bhava) と無 (abhava) の両極端を離れたものであるが故に、あらゆる自性の不生を特質とする空性が、中道 (madhyama-pratipad)、すなわち、中道 (madhyama-marga) といわれる^⑭。

と。これは、中論偈の第二章「観聖諦品」の第一八偈における「中道 (madhyama-pratipad)」に対する註釈文の一部であるが、このように、「あらゆる自性の不生を特質とする空性」が「中道」であると明示されている月称の中道観は、まさしく、「絶対否定の精神」にほかならない。先に引用した宝積経迦葉品において、その「中道」の内容が、形相を有せず、指示されず、固定されず、無頭現であり、標識されず、知識されないものである^⑮。

と説明されていたが、これこそ「絶対否定」としての「空性」の説明であることはいうまでもない。従って、中観説における「中道」とは「空性」にほかならず、その「空性」は「絶対否定」というあり方において実現されるのであるから、中観説における「中道」は、まさしく「絶対否定」による「中観の仏道」にほかならない。この点について、ツォンカパ (Tsong-kha pa, 宗喀巴) は、かれの入中論積の中で、次の如くに的確に説明している。

われわれ (中観者) は、"それは無である"、"それは有である"と証成しないのであって、他の人 (対論者) によって、有と分別され、無と分別されたものを否定するだけである。すなわち、有と無に関する両方の極論 (anta) を排除して、中道を成就せんがためである、と説かれているのも、対論者によって承認されている有であるという極論と無であるという極論の両方を排除するだけであって、それらを除いた〔第三の〕他のものを「中道として」証成するのではない、という意味である^⑯。

と。これが中観説における「絶対否定の中道」のあり方である。このように、中観説における「絶対否定の精神」は対立

概念の否定であり、従って、対立を生み出す自らの主張を持つべきではないというのが、月称の「絶対否定の中道」の立場であるといえる。そして、「八不」はそのことを表明している中道精神である、と月称は了解しているのである。ともあれ、この「自らの主張を持つべきではない」という八不の精神は、月称によって特に強調されているといえるが、しかし、龍樹の六十頌如理論（第五〇偈）や廻諍論（第二九〜三〇偈）においても、また、龍樹の直弟子聖提婆の四百論偈（第八章第九〜一〇偈、第二章第一五偈）においても明示され、中観説にとつて基本的な事柄であるといえよう。この点について、月称は、入中論（第六章）においても、法無我説示の諦め括くりとして、その第一一八偈と第一一九偈において、仏道実践の上からも、

「龍樹の中」論における伺察は、自らの主張を設定して、対論者の主張を遮遣することを特質とする論争に愛著せしめんがためになされるのではなく、解脱せしめんがために、空性なる真実を説くものである。真実を解説するとき、もし対論者の本典によって仮設されていたものが破滅するならば、われわれに「自らの主張がないと批判する者の指摘するような」過失はない。自らの見解に愛著し、同様に対論者の見解に激怒する

それが束縛の分別というものである。それ故に、自らの主張に愛著して他の主張を瞋恚することが除かれ、かくして、「縁起の」道理をもって伺察するとき、速やかに解脱することになる⁹⁾と述べ、「自らの主張なき立場」が、中観説における「中道としての仏道」の基本的なあり方であることを説明している。

結

以上、中観説における「中道」について、月称の了解を中心に究明してきたが、その内容を要約すれば、中観説における「中道」とは、自らの主張すらも認めない八不という絶対否定の精神である、ということにつきるのである。ところで、ここに「自らの主張を認めない」ということは、より積極的にいえば、「自らの主張を持つ必要がない」ということであり、さらには、「自らの主張を持つことは誤りである」ということであるが、しかし、どのような思想基盤の上でそのようにいい得るのであろうか。八不という否定精神は、絶対否定 (prasajya-pratishedha) という否定型においてあり得ているが、それでは、どうして絶対否定の精神であらねばならないのか。

このように問起するとき、「一切法は無自性である」という龍樹の空性思想が、その思想基盤となつていてということとは自明であろう。しかし、その空性思想をどのように了解するか、ということになると必ずしも単純ではないのである。経論には種々の空性が説かれ、論師たちは種々の空性を主張するのである。²¹⁾

従つて、終りに、月称が、中観説における「中道」とは「自らの主張を持たない絶対否定の精神である」と規定することを可能にするその場合の月称の空性理解こそが問われなければならないであろう。この点について、月称は、龍樹の中論偈第一三章「観行品」の終り第七偈と第八偈に対する註釈の中で、祖師龍樹の空性理解を祖述しつつそれが「中道」であることを明確にしている。その内容を要約すれば、その最後に教証として引用されている宝積経迦葉品の一文がその内容を的確に述べているので、次に、その要点を示すと、

空性によって諸法を空なるものとなすのではない。しかも、諸法こそは空なのである。……このように觀察するのが、迦葉よ、中道なる諸法の如実観といわれる²²⁾と。この教証の上に、月称は自らの空性理解と中道観の完全な一致を見ているといえるのである。ここに、「空性に

よつて諸法を空なるものとなすのではない」と説かれていることの意味は、空性を真実在として実体化して、その空性によって空にあらざる諸法を空とする、といった空性理解に対する批判である。一切諸法は本来的に空であり、空にあらざる諸法は何ら存在していないという本性空においては、「空性によって諸法が空となる」という論理はありえないのである。月称が「絶対否定の中道」というとき、その思想基盤は、この教証に示された本性空に対する理解においてあり得ているということである。

ちなみに、ここに「空性によって諸法が空となる」という空性理解が批判されているが、月称にとっては、具体的には、それが唯識説とそれに追隨する清弁のスヴァータントリカ (Svatantrika・自立論証派) 中観説における空性理解に対する批判であることは明らかである。そして、月称は、そのような唯識説的な空性理解は、本当の意味での本性空という空性理解ではなく、空性理解の最低のものであると、入楞伽経を引用して批判しているのである。²³⁾

ともあれ、月称が意図する「絶対否定の中道」とは、龍樹によつて、

およそ、空性を「一つの」見解とするかれらには不治の者であると説きたまう²⁴⁾

といわれ、聖提婆によって、

空にあらざる「諸法」を空の如くに見るのではない^⑤
といわれているその理解における「空性」を基盤としてあ
り得ているのである。

〔本稿の内容に関する拙文としては、「仏教の否定型と中道―月
称の中観から―」(昭和五二年秋季大谷学会研究発表要旨)、『絶
対否定の中道』(日本宗教学会研究発表要旨)、『宗教研究』二一
八)がある〕

註

① 宮本正尊「中道思想の歴史社会性」(金倉博士古稀記念『印
度学仏教学論集』)、春日礼智「中道の根本思想」(印度学仏
教学研究一四の一)、小林円照「カビールの『中』(madhi)
について」(印度学仏教学研究二八の二)、その他。

② 中観説と中道に関しては、中村元「中道と空見―三諦偈」
の解釈に関連して―(結城教授頌寿記念『仏教思想史論集』)
に詳しい。尚、長尾雅人「中辺分別論の題名」(同書二〇三
～二〇五頁) 参見。

③ 例えば、西義雄著『原始仏教に於ける般若の研究』(一九
一～二頁)、前掲の春日論文、などを参見された。

④ Prasannapadā, p. 270, ll. 7～9. 所引 / asīti kāsya
ayam eko anto nāstīti kāsya ayam eko antah / yad
enayor dvayor antayor madhyain tad arūpyam andar-

śanam apratiśṭham anabhāsam aniketam avijñaptikam
īyam ucyate kāsya madhyama pratipad dharmānān
bhūtapratyavekseti //

ちなみに、いまは asti を「有」と訳出し nāsti を「無」
と訳出し、anta を「極論」と訳出したが、ここに否定され
たところの asti は、「有無の二見 (bhāvābhāvadarśana-
dvaya)」にほかならぬ (Prasannapadā, p. 276, ll. 9～
11)。

⑤ この点については、『山口益仏教学文集』(七一八頁)を
参照されたい。尚、同様に、有無＝常断の否定が中道である
とする理解については、月称の五蘊論にも見いだされる(山
口同書八〇〇頁参照)。

さらに、月称は、中論偈の第一八章「観我品」の第六偈。
くdに對する註釈において、我見と無我見を否定せんがため
に同じく迦葉品を引用しているが、そこに引用されている迦
葉品の一文も「中道」を説明しているものであり、「我(at-
man)」と「無我(nairātmya)」の二見の否定が「中道」と
されている。ちなみに、それ以外の文章は全く先の用例と同
様である (Prasannapadā, p. 358, ll. 10～12)。

参考までに、迦葉品の同じ場所における二極論(二辺)とわ
れつゝそのな、常(nitya)と無常(anitya) 我(atman)
と無我(nairātmya) 真実心(bhūta-citta)と非真実心(ab-
hūta-citta) 善(kuśala)と不善(akuśala) 世間(loka)
と出世間(lokoṭtara) 有罪(sāvadya)と無罪(anavadya) 有

て理解するところには、それは肯定を主とするものであるから、諸法は生じたのではないものであると肯定して、不生を説示することになるから、中観説の教義 (krītaṅka) と離れたものとなる。」(前掲、槐山論文四三二〜四三三頁、江島著九四〜九五頁、一一三頁以下、参見) と、月称と同様な自らの立場を表明している。尚、前掲の江島著(一一八頁参見) においては、このような二種の否定型を導入して、本性空における否定型を「絶対否定」と規定したのは、清弁が最初ではないかと推定されている。

⑭ prasāṅgaviparītena cārthena parasyaiva sambandho / nāmnākāni svapratijñāyā abhāvāt / (Prasannapadā, p. 23, l. 3). 拙著『空性思想の研究』六六頁参見。

⑮ / niḥsvabhāvabhāvāvadīnā svasabhāvabhāvāvadīnāḥ prasāṅga āpadyamāne kutah prasāṅgaviparītarthaprasāṅgiā / (Prasannapadā, p. 24, ll. 2〜3). 前掲拙著六六頁参見。

⑯ / tatas ca parāpratijñāpratiśedhamātra-phalatyāt prasāṅgāpādanasya nāsti prasāṅgaviparītarthāpatitiḥ / (Prasannapadā, p. 24, ll. 5〜6). 前掲拙著六六頁参見。

⑰ ato dhāvābhāvāntadvayarahitāt sarvasvabhāvānupratilakṣaṇā śūnyatā madhyamāpratīpan madhyamo mārga ity ucyate (Prasannapadā, p. 504, ll. 13〜14)

⑱ 脚註④参見。

⑲ / kho bo cag hāi med pa dan yod par mi sgrub kyī

/ gshan gyis yod par btags pa dan med par btags pa hlog ste / mthab gnīs bsal nas dbu malji lam sgrub par hdod pahi phyir ro // shes gsuñs pa yah pha rol pas khas blañs pahi yod mthab dan / med mthab gnīs rnam par gcod pa tsam yin gyi / de ma glog pa gshan mi sgrub ces pahi don no // (TGS. 81b^v-s). 前掲拙著四八〜四九頁。

⑳ この二偈については、Jayānanda と Tson kha pa の註釈によつて、言葉を補足して解説を試みた。詳しくは、前掲拙著二四九頁以下を参見。

㉑ 例えば、八千頌や二万五千頌般若経には、四空とか一六空とか一八空などが説かれ、空性の種々のあり方が示されている。また、大乘仏教にあつても、中観説と唯識説において、空性理解が一致しているわけではない。月称は、入中論(前掲拙著一七三頁参見) においてその点に言及しているが、それに関しては、別に論考したのでそれを参見されたい(春秋社刊『講座 大乘仏教』第六卷 未巻)。

㉒ / yan na śūnyatayā dhammān śūnyān karoti / api tu dharmā eva śūnyāḥ / …: yāvān pratyavekṣā iyaṃ ucyate kāśyapa madhyamā pratīpad dharmānān bhūta-pratyavekṣā / (Prasannapadā, p. 248, ll. 4〜7). 前掲拙著一一七頁参見。

㉓ 前掲拙著一七三頁参見。尚、その他、一一六頁以下、一七三〜一七四頁、等も参見された。

ちなみに、この問題については、先に掲げた拙文(脚註²⁴)
において論究したので参見されたい。そこにおいて明らかに
されている如く、この入楞伽經を教証として唯識説の空性を
批判するというやり方は、チベット仏教に引き継がれている。

²⁴ 龍樹『中論偈』第一三章第八偈 c~d, *yesam tu śūnya-*

tadrūṣis tan asādhyaṅ bahāṣire // (*Prasannapadā*, p.
247, l. 2).

²⁵ 四百論第八章第七偈 e。 *ston min ston ltan mthoṅ min*
te / 前掲拙著一八頁参見。

(本学助教 佛教学)